日常のクリスマス
オロリヤ鉛筆堂
18禁

「ゆっこ、昨日の筋肉挽歌見た？」
「見た見たー。山田さん、これからどうするんだろうね？あはは……（ま、麻衣ちゃ～！みおちゃんは筋肉挽歌見てないんだってば～！）」
……と、どーしよ～。みおちゃん、後ろでフツーに困ってるよ～！
今日はクリスマスイブ！（キャラ～ン☆）だからみおちゃんと麻衣ちゃんと私の３人で、私んちでクリスマスパーティするんだ。今は商店街まで買出し中なんだよ。
でも麻衣ちゃんたら困るんだよ？みおちゃんもいるのに、私と麻衣ちゃんしか分かんない話ばっかり振ってくるの。
エハ
ケイ

「…ほら。ゆっこのあそこ撮られちゃったよ…？
エッチな女子高生２人組、写っちゃった…」
「ま…麻衣ちゃん…。私、恥ずかしいよぉ……。
誰かに見られちゃう……」
「…大丈夫。私も一緒だから……。
あそこも、おけけも丸出し…おそろいだよ…」
それから、ちょっとだけゲーセンに
寄っていこうってことになったんだ。
だけどやっぱり、麻衣ちゃんたらおかしいの！
ふたりだけでプリクラ撮ろうっていうから
何かと思ったら……
エッチな写真撮ろうって言うんだよ～！？
何枚も撮ってから、いつものちっちゃな声で
麻衣ちゃんが言うの…

それから、私んちに集まって――
１０時くらいまでパーティしたの。
んで、麻衣ちゃんは泊ってくことになったんだ。
みおちゃんも誘ったんだけど、
年末まで、マンガ描くのに忙しいんだって。

「えへへ～♪
一緒に寝るの久しぶりだね、麻衣ちゃん♡」

「…うん♡」

あ、ご機嫌なおったみたい。
だから私、麻衣ちゃんに聞いてみた。

「ねえ麻衣ちゃ、
夕方はどうして、みおちゃんに
いじわるしたの？」

「…してないよ」

「してたよぉ。
みおちゃん困ってたよ？
『麻衣ちゃんだから
しょうがないや』
って顔してたけど」

「……
だって、みおがゆっこに
男の話なんてするから……」

「あ、笹原先輩のこと？」

「……」

「別にいいじゃんかぁ～、みおちゃんは
笹原先輩のこと好きなんだもん♪
クリスマスに、一緒にいられたらな～、って
そのくらいの話はしちゃうんじゃない？」

「…男の子なんて、つまんないよ」

「え？　……どゆこと？」

「ゆっこと一緒のほうが、おもしろいよ。
…絶対」

麻衣ちゃんはそう言って、私のことを
じ～～～っと見たの……。

ま…麻衣ちゃん…。
そんな目で見られると私…困っちゃうよ…。

「ゆっこ…かわいい」

あ…、麻衣ちゃん、また
私にエッチなことしようとしてる……。

麻衣ちゃんは
困ってる私のパジャマをポイポイって脱がせて、
代わりに、クリスマスツリーを飾ってたリボンを
クルクル巻いたの。

「男の子なんて知らない……
ゆっこのほうがいいよ」

そ…そんなの私、わかんないよ……。

「それとも、ゆっこは……
みおみたいに、彼氏が欲しい……？」

そ、それもわかんないけどぉ、でも、でも…。

むにゅむにゅしちゃう私をじーーーっと見つめる
麻衣ちゃんは、小学校の頃とずっと同じ。

教室のすみっこにいた麻衣ちゃんと
初めて目が合ったあのときーー
あのとき私、
すっごい子がいる！ チョーおもしろい子がいる！
そう、思ったんだ。
そしたら麻衣ちゃんも、そんな私のこと
気に入っちゃったみたいで、
それから私たちはずっと一緒……。
いつだったか、
ずっと一緒に遊ぼうねって約束もしたよね。

だ、だ、だけど、それは
こういうことと違うんだよ？
こうやってはだかんぼになって、
彼氏と彼女がするみたいなこと
するためじゃないんだよ？
ねえ麻衣ちゃん、分かってる？
それともこれも高度なボケ？

で、でも、なんでかな……。

麻衣ちゃんもパジャマ脱いで
はだかんぼになってるの見ると、
私……私……

なんか、エッチなこと
考えてるときみたいにどきどきして……
おっぱいの先っぽがカタくなって……

あーーっ、どうしよ……
このままじゃまた、麻衣ちゃんに
エッチなことされちゃうよぉ……

「ゆっこのこと…食べちゃうね」

麻衣ちゃんは私のあそこが好きなんだって。
私の部屋でふたりきりになると、すぐ、
私のパンツの中におてて入れてきて…
（パンツの上からのこともあるよ）
もみもみってしてくるの。
『私しか触ったことの
ないところだから、
触ってると落ち着く』
んだって。

でも麻衣ちゃんが
一番好きなのは……
こうやって、あそこを
かぶかぶはみはみ
すること。

「いい匂い…ゆっこ。
あそこも…せっけんの
匂いがする……」

やっ！やぁだ、ダメだよ
麻衣ちゃっ。
そんなとこ
クンクンしちゃ
ダメだってばぁ…

ど、どうしよう。
ヘンな声出ちゃうよ……。
だって、あそこが麻衣ちゃんの
ベロと息で、ぬめぬめして
あったかいんだもん…。
唇が柔らかいんだもん……。

「ゆっこ、見て……。
私がゆっこのあそこ、
おしゃぶりしてるとこ…」

や、やだよう、恥ずかしいよう…。
だって、だって、
おまたの間に大事なお友達の顔があって……
おまけにそのお友達が、私のあそこちゅーちゅー
しながら、私のことジーッと見上げてきて……。

「ゆっこ……。好き……」

ひゃあああああああ……！！
ダメだよぉ、今そんなこと
言っちゃやだぁ…！

「ゆっこ……気持ちよかった？
じゃあもっと気持ちよくしてあげる……」

え…？ 何？ 今度は何なの麻衣ちゃ…。
私が聞くと麻衣ちゃんは、脚を
ふにゃっと開いて……

「ほら…私、
おちんちん生えちゃった……」

きゃ！？ 何それ、なんかパンツの中で
ブーーーッて揺れてるよっ！？
分かった、こないだ見せてくれた
ローターってヤツでしょ！

だけど麻衣ちゃんは知らんぷり。
さっきちょっとだけ飲んだ
あま～いワインのせいかな、
いつもより熱っぽく私を見つめて……
それでいつもより高い声で、
言ったの。

「ううん、
おちんちんだよ……？
ゆっこのこと好きだから
生えてきちゃった……。

これでゆっこのこと、
セックスしちゃう……
男の子にされないうちに…
いっぱいシちゃうっ…」

「はあっ…はあっ…。ゆっこ…ゆっこっ……」
あ♡ あん♡ 麻衣ちゃ、麻衣ちゃあんっ…。
そんなにギュッてされたら、私壊れちゃうよっ。
それに、麻衣ちゃんがヘコヘコお尻動かすたびに、
ローター？が私の大事なところにあたって…。
「ゆっこ、好き、好きっ…
男の子になんて絶対あげないっ…」
ひゃあああ！
麻衣ちゃん聞いてっ、優しくしてぇっ…！
私のハダカいっぱいにくっついてくる
麻衣ちゃんのすべすべしたハダカ。
いい匂いのお肌と長い髪。
ゆっさゆっさドウブツみたいに
揺れてるお尻と、
私の脚に絡んで離れてくれない
柔らかいあんよ。
それに私のあそこに
もぐりこんでくる
麻衣ちゃんの
おちんちん……。
どうしようっ、どうしようっ、
こんなの私、麻衣ちゃんに
食べられてるみたい…。
ハダカとハダカがとろけあって、
知らないところに
連れて行かれちゃうっ…。
麻衣ちゃん♡ 麻衣ちゃぁん♡
私こわいよぉ…！

はぁっ…はぁっ…、麻衣ちゃあん……。
私、もうふにゃふにゃだよぉ……。
そしたら麻衣ちゃんは、突然私から離れて、
ベッドの上にコロンッて横になった。
パンツを脱いじゃった麻衣ちゃんのあそこ、
キレイ……！
ぬるぬるになったピンク色のお肉が、
何かが欲しくて寂しいみたいにヒクヒクしてた。
見とれてる私に、
麻衣ちゃんは――さっきよりも高くて、
かすれた声で言ったの。
「こ…今度は、ゆっこがシて……」
ええっ！？ やだよぉ、私そんなの
わかんないってばっ……。
「やだっ…！
シテくれなきゃやだぁ…！
ゆっこが欲しいよぉっ…！」
生まれて初めて聞く、
麻衣ちゃんの泣きそうな声。
おめめに涙をいっぱい溜めた
麻衣ちゃんに、また
じーーーーっと見つめられて
私…私……！！

「あ♡ あ♡ ゆっこ♡♡ すごいよっ♡♡
好きっ♡ 好きっ♡ ゆっこ好きぃっ♡♡」

麻衣ちゃんは一年分くらい声を出して、
生クリームより甘い甘い声で私をたくさん呼んでくれた。
だから私も、いっぱいお尻動かして、くりくりしたところが
たくさん当たるようにして……。
最後は私も麻衣ちゃんも、
お互いにじーーーっと見られながらイっちゃった……。

もっ…もう私知らないっ！ 知らないからぁっ！
気付いたら私もパンツ脱いで、麻衣ちゃんを夢中でエッチしてた。
麻衣ちゃんのあそこに、私のあそこをくっつけて、
むぎゅむぎゅ、ぐりゅぐりゅって……。
麻衣ちゃんと私の、いちばん柔らかいピンク色のお肉が
ぬるぬるの中でくちゅくちゅって寄せ合わされて、
エッチなキスみたいにお互いにはみはみして……。

私、なんでこんな風にしようって思ったんだろ？
でも、とにかく、麻衣ちゃんと私の大事なところを
ギューギューしたくて…。

「……」
エッチなこと、たくさんした後……
さっきまで別人みたいに夢中で喋ってた麻衣ちゃんは、
何故か黙っちゃって、ソッポを向いてた。
お酒が抜けたら、ちょっと恥ずかしくなっちゃったのかな？
くちゃくちゃになったシーツの上で、
はだかんぼで黙ったままの私たち……。
ねえ麻衣ちゃん、
こっち向いてチューしよ、麻衣ちゃん。
ホントは甘えんぼで、
はかせみたいに寂しがり屋さんな
私の大事なお友達。
私はどこへも行かないよ。
絶対麻衣ちゃんをひとりにしないよ。
私と麻衣ちゃんの『好き』が、少しズレてても。
いつか麻衣ちゃんに、
私より大事な人ができても。
いつか私たちがオトナになっても。
だから、あんまりみおちゃんに
イジワルしないでね！♡

今年はいろいろありましたが、
麻衣ちゃんとゆっこたちに会えたことは、
本当に文句なく、誰が何と言おうと幸せです。
麻衣ちゃんに、
じーーーーーっと見つめられてみたいです。

みおちゃんも大好きですよ！
なかなか描く機会がない上に、麻衣ちゃんとゆっこの本ばかり
描いているので、ついついあぶれた立場に置いてしまいがちなんですが…。
なんというか、こういう本を描いている気持ちが長野原先生なんです！（寝言）

本当に素敵な女の子たち、男の子たちが住んでいる時定です。
あらゐさんが紹介していた
ポプティランの「forever young」がぴったりな場所だと思います。

kumomadoriラジオも聴けずに
ずっとエッチな本を描いていた無有利安でした。

「日常のクリスマス」

作：無有利安（オロリヤ鉛筆堂）

http://ororiya.sakura.ne.jp/
murian0289@hotmail.com